

同朋大学仏教文化研究所

二〇一七年度前期史料展示

お経のかたち

く来て見てさわって仏教文化く

佛説同朋經卷上

知是我輩一持佛在同朋國祇那羅刹與大



はじめに

お経とは本来、釈尊の教えを文字化したもので、釈尊入滅後、その教えを記録し残そうとした仏弟子たちによって編集され、成立しました。当初のお経は、古代インドで多羅樹の葉である貝多羅葉に横書きの梵語で記されましたが、その後一世紀頃に中国へ伝来すると、梵語から漢語へ、横書きから縦書きへ、さらに紙の発明によって紙の卷子装へと、そのかたちが変化していきました。このかたちのお経が、日本へ伝来したのです。日本では、漢訳のままのお経が、卷子のかたちで長く伝統的に使われましたが、書物の普及、印刷技術の発達などにより、そのかたちは折本装や冊子装のものが少しずつ増えていきます。

しかし、お経は単なる書物ではなく、宗教的意味合いが強いものです。とりわけ、仏事で拝読するものは、かたちの上でも本来性・伝統性を重んじます。そのため、一般の書物の変化・発達とは必ずしも軌を一にするというわけではありません。現在でも、拝読に使うお経は、冊子装ではなく折本装のものがほとんどで、とくに格式の高い仏事などにおいては、卷子のお経を使用することもあるようです。

本展示では、お経のかたちに注目し、その変遷やそれぞれのかたちの使いかた、さらに真宗のお経・声明のかたちに息づく仏教文化の伝統的側面を展観します。そして、実際にお経を手に取り、さまざまなかたちの機能を比較できるように、実践コーナーを設けました。実際に体感することは、単に「知る」だけではなく「考える」ことにもつな

がります。それぞれのかたちの利点や欠点を感じ取りながら、かたちがなぜ変化したのか、なぜ今もこのかたちなのかという問題を考えていただければと思います。

* 本図録で「お経」「経典」という場合は、原則として、経・律・論のうちのそれを指し、本来の意味で使用しています。

付記

・本図録は、同朋大学仏教文化研究所二〇一七年度前期史料展示「お経のかたち―来て見てさわって仏教文化―」展開催にあたって作成したものである。展示の会期・会場は、次のとおりである。

〔会期〕七月七日（金）～十三日（木）

〔会場〕D o プラザ 閣蔵一階ギャラリーD o

・本図録の編集は、同朋大学仏教文化研究所において行った。

企画統括：安藤弥（所長） 執筆：大艸啓（所員）

撮影：大艸啓、中川剛（客員研究員）、日比野洋文（特別研究員）

・図録の番号と展示番号は一致しない。また、展示には参考資料をさらに出陳した。

・法量の単位は、いずれもセンチメートルである。

・奥書等の識語については、明治以前のもので、当該品の成立当初のものと思われる場合のみ積文を記した。

・所蔵者の明記がないものは、すべて当研究所所蔵品である。

・展示の実施にあたり、瀬尾正寿氏（本学講師）をはじめ、多くの方々の協力を得た。また、会期中に開催したワークショップでは、左の諸氏の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

企画：藤井由紀子（所員） ゲスト：白鳥建二（マッサージ師）

リードユーザー：齋藤聖（本学院生）、市川綾子（本学学生）

1 ささまざまなお経のかたち

—巻子から折本 冊子入—

日本にお経が伝来したのは、六世紀中頃と考えられます。そして、仏教が大々的に興隆した八世紀以降、お経は大量に書写され、その遺品が少なからず伝存しています。巻子に仕立てられた継紙に、謹直な文字が一行一七字で縦書きに記されるのが正式な写経でした。この形式は、長く伝統的に守られ、折本や冊子の書物が出現してからもしばらく、お経は巻子に仕立てられるのが原則であったようです。

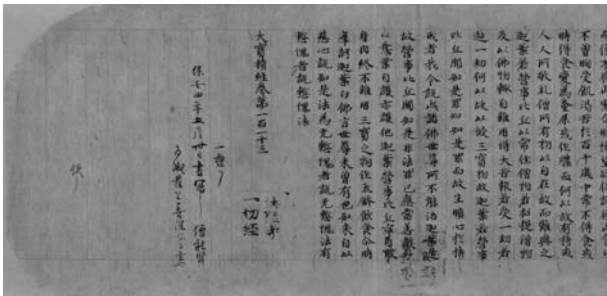
しかし、中国の北宋代に折本で開版された宋版一切経（No.5）が伝来したことにより、日本では書物のかたちが大きく変わっていきます。巻子は開くの不便ですが、折本はこの難点を解消し、巻子からの改装が比較的容易です（No.4）。また、「大般若経」などの転読作法にも適したかたちでした。こうして折本は、お経の新たなかたちとして定着していきます。近世になると、民衆へのお経の流通と相まって、複数のお経を一つにまとめたものや小型のもの（No.6）など、普及版ともいべき折本経も刊行されるようになります。現在では、「折本といえばお経」というほど、お経にはほぼ限られたかたちになっています。

冊子は、日本最古のものとしては九世紀まで遡り、書物には比較的早くから浸透した装幀ですが、お経はその影響を受けた形跡があまり見受けられません。平安後期に書写された法隆寺一切経（No.1〜3）では、一部冊子が含まれ、使用目的によって装幀が異なる事例として注目されますが、大部分は巻子です。中世以降、大寺院で多くのお経が袋綴などの冊子装で開版されることもあります（No.7・8）、それらは、教学研

究などの目的で使用されることはあっても、仏事で拝読に使用されることはほとんどないようです。お経は、日本に伝来してからながらく、日本語訳されることなく漢訳のまま使用され続けました。また、現在でも折本のお経は、一行一七字という当初の形式を継承している場合が多いです。このようなお経のすがた・かたちに現れた伝統性こそ、日本人が守り続けた仏教文化の特徴といえるでしょう。

1 大宝積経 巻一三 一巻（同朋学園所蔵）

紙本墨書・巻子 縦二六・四×横九〇三・三

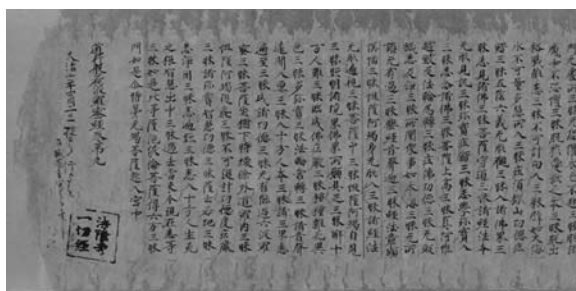
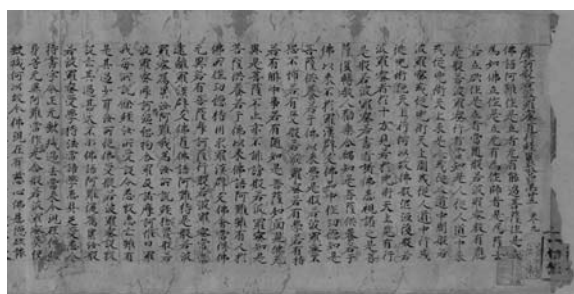


【奥書】〇は改行を示す。以下同じ）

二校了 / 保安四年五月卅日書了 僧能賢 / 為滅罪生善除交与樂也 / 一校了

2 摩訶般若波羅蜜道行經 卷九 一巻（同朋学園所蔵）

紙本墨書・巻子 縦二七・〇×横八六三・一

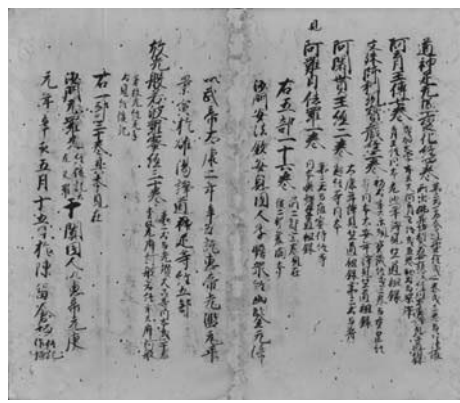


大治二年四月二日一校了 信与之 / 為滅罪書写之畢

【奥書】

3 貞元新定釈教目錄 卷四 一冊（同朋学園所蔵）

紙本墨書・粘葉装 縦一八・一×横一六・五

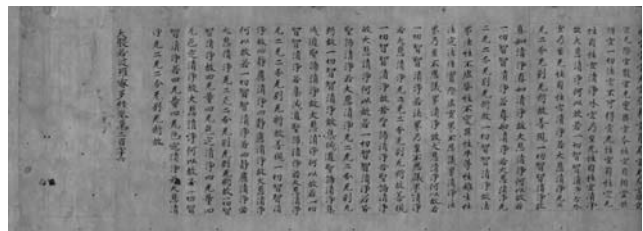
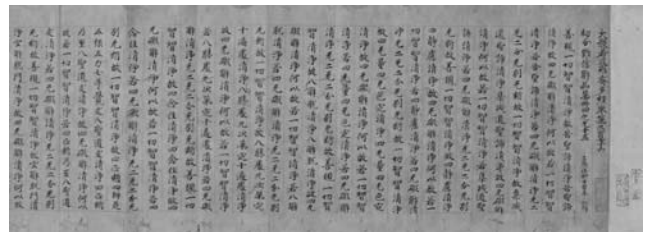


No. 1～3は、

法隆寺一切経の一具であつたもの。No. 1は、保安四年(一一二二)の奥書と陽刻黒方印「法隆寺一切経」が九顆あり、No. 2は、大治二年(一一二七)の奥書と右の印が八顆ある。No. 3に奥書及び法隆寺印はないが、僚卷の卷一〇(大治四年の奥書、同朋学園所蔵)の存在により、No. 1・2と同じく、

4 大般若波羅蜜多經 卷二七六 一帖(同朋学園所蔵)
紙本書・折本 縦五・五×横七・八
【奥書】

一交了



略して「大般若経」とも。当経は、全六〇〇巻と大部であるが、広く読誦等に使用され、とくに転読に用いられる経典としてよく知られる。本品は、全一七紙からなり、虫損がほぼ等間隔で、左へ進むに従つて少しずつ間隔が狭くなることから、原装は卷子であつたことが分かる。一六箇所ある紙継目も、すべて当初のものではなく、改装時に貼り直されたものである。鎌倉期以降、次第に折本が普及していくと、本品のように卷子から折本への改装が広く行われた。本品の改装時期は不明であるが、書写年代は、折本が普及する以前である可能性がある。

5 摩訶衍宝嚴經 一帖(同朋学園所蔵)

整版・折本 縦二七・七×横一一・〇

【巻頭刊記】

福州東禪東覺院住持伝法慧空大師冲真等謹募衆縁恭為／今上皇帝 太皇太后皇太后 皇太妃祝延 聖寿国泰民安／開鑿大藏経印板一副惣計五百函函各十卷元豊八年乙丑歳五月日謹題



北宋代に開版された宋版一切経のうち、元豊三年(一〇八〇)より刊行された東禪寺版と称されるものの一具。はじめて折本装で刊行された整版の一切経で、諸国への影響は大きく、日本でも折本が普及する重要な契機となった。また、仏典だけでなく、書物全般の形態にも大きな影響を与えた。本品は、元豊八年の刊記があり、半折六行、一行一七字で、当一切経の標準的な版式である。表紙は後補であるが、原表紙外題(紺紙金字)が貼付される。外題・内題下方の「推」の字は、千字文による当一切経内の順序を示す。

6 妙法蓮華經 一帖 整版・折本 縦一八・〇×横七・四



通称「法華経」。全八巻よりなるが、本品は巻ごとに仕立てず一帖に合本し、四辺もやや小さめである。印刷・出版事業が普及する近世以降、使用頻度が高い經典などは、複製巻を合本した折本が流通する。それらは、本品のように、宋版一切経（No.5参照）以来の半折六行、一行一七字という形式にならう場合が多い。

版本經典の普及に多大な影響を与え、近代までその權威を有した。本品は、寛文十二年の刊記があり、四周双辺で無界、半丁一〇行、一行二〇字、返り点・送り仮名付きの版式である。

8 無量壽經 一冊 整版・袋綴 縦二六・八×横二七・二



近世に個別に出版された冊子装の經典。一切経ではない特定の經典の版本は、黄檗版の開版以前より出版されることもあったが、黄檗版刊行以降は、その影響により、同様の版式のものも多く出版された。本品は、半丁九行、一行一九字であるが、それ以外はNo.7と同様の版式である。

7 十住経 二冊 整版・袋綴 縦二七・一×横一九・四

【奥書】
武州江戸赤坂盛徳寺直対施實刻此ノ十住経第三巻 為薦
良易和尚ノ沙門鉄眼篆刻ノ寛文壬子仲夏 黄檗山宝蔵院識



寛文九年（一六六九）より開版された黄檗版一切経の一具。日本ではじめて整版で刊行された一切経で、

II 読む・聴く・唱和するお経と声明

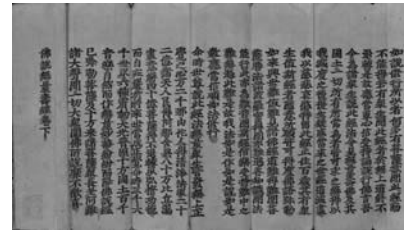
—真宗仏事とお経の伝統—

日本の各宗派では、祖師や高僧が述作した和讃などの声明も、お経とともに仏事で拝読されています。親鸞を宗祖とする浄土真宗は、その代表的な宗派です。初期における真宗の読経・声明の実態はよく分かっています。本願寺第八代蓮如（一四一五〜九九）

は、それまで勤められていた六時礼讃を改め、六首引の和讃勤めとし、「正信念仏偈」「三帖和讃」（No.12）を開版して勤行式を定めました。当初は、「正信念仏偈」や「三帖和讃」などは、本を用いず暗誦されていたようですが、今日に至るまで、蓮如が確立した声明がほぼ継承されているといわれています。

真宗のお経・声明には、僧侶と在家門徒がともに唱和するものや、僧侶が拝読して門徒が聴聞するものなどがあり、門徒とともに教えを聞きながら仏事をいとなむという点が、真宗の仏事の特徴といえます。そのお経・声明本を詳しく見ていくと、そのかたちは実にさまざまです。例えば、「阿弥陀経」をはじめとする浄土三部経（No.9〜11）は、現在でも折本を使用することがほとんどですが、巻子の三部経を安置したり（荘経、裏表紙参照）、読経に使用したりする場合もないわけではありません。また、お経以外の声明本は、在家用のものを含め、書物のかたちとして一般に普及した冊子のものがほとんどですが、本願寺より寺院に下付されたような、より正式な声明本は、冊子装ではあるものの、大きさや表紙の装幀が、在家用のものとはだいぶ異なっています。さらに、毎年の報恩講で読まれる「御伝鈔」（No.14）や「御俗姓」（No.15）などの拝読物は、東本願寺をはじめ、現在でも巻子が用いられる場合が多いようです。これらは、使用される仏事の格式や使用の頻度、または成立当初の形態・使用方法などの違いによると思われるが、その理由は必ずしも明らかではありません。ただ、それらのなかには、お経の伝統性に通じるような、日本人ならではの宗教文化の名残りも潜んでいると思われる。

9 無量寿経 二帖 整版・折本 各縦二八・〇×横七・六



この形態のものが正式である。

12 正信念仏偈・三帖和讃 四冊(個人所蔵)

整版・粘葉装 縦一九・二×横二四・二

【奥書(「正像末和讃」)】

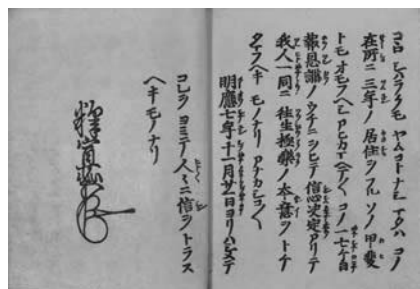
常如上人改補之版以経ノ於百余年字画稍湮滅矣ノ近欲改刻而未果爰今年ノ春洛陽有災煽熾及我堂ノ宇此時彼版亦罹災焉因ノ今追摹旧本開成新鑄云ノ天明第八龍次戊申仲冬ノ乗如(花押)



乗如が天明八年(二七八八)に再版した旨とその署判がある。紺地金欄の表紙(後補)で三万金が施され、本文には、片仮名の振り仮名が付される。本品のように粘葉装である場合が多い。

13 五帖御文 五冊 整版・袋綴 縦二六・九×横三二・〇

【奥書(各帖)】 釈宣如(花押)



10 観無量寿経 一帖 整版・折本 縦二七・九×横七・五
11 阿弥陀経 一帖 整版・折本 縦二八・〇×横七・八

No.9〜11は、「浄土三部経」と総称される三種の経典それぞれの折本経で、江戸時代のものと考えられる。

各経の各巻を二帖とし、料紙の大きさと一行の字詰めを二七字にするなど、卷子ではないものの本来の形態に則っている。現在でも、寺院で拝読される経典は、

「正信念仏偈」は、親鸞の主著「教行信証」の行巻末尾に掲げられた漢文体の偈文。略して「正信偈」ともいう。真宗声明のうち、門徒の間で最も親しまれている。「三帖和讃」は、親鸞が撰述した和讃で、「浄土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」からなる。「正信念仏偈」と合わせて四帖一部として、本願寺第八代蓮如が文明五年(一四七三)に開版した。

本品は、慶長四年(一五九九)の再版、延宝五年(一六七七)の再版それぞれの刊記と、東本願寺第十九代

「御文」は、蓮如が真宗の教えを分かりやすく説いた消息形式の仮名法語。実如時代に、二〇〇通以上のなかから八〇通にまとめられ、五帖(五冊)として成立したとみられる。

本品は、東本願寺第十三代宣如(一六〇四〜五八)の署判があり、格式が高い表装になっている。本願寺歴代が署判を添えて寺院に下付した「五帖御文」の遺品は多々見られ、通常の冊子装のもの比べて、やや四辺が大きく目で、五つ穴の朝鮮綴であるのが特徴である。

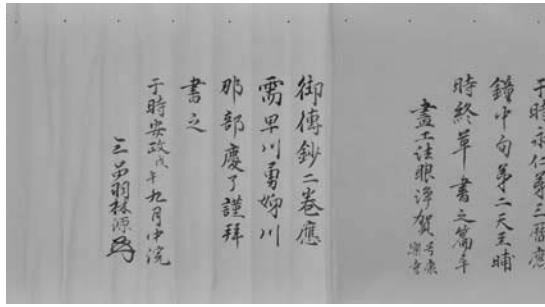
14 御伝鈔 二卷 (個人所蔵)

紙本墨書・卷子 上巻縦三〇・六×横二一九・六

下巻縦三〇・八×横二二二〇・九

【奥書】

御伝鈔二巻迄ノ雷草川勇姉川ノ那部慶了謹拜ノ書之ノ于時
安政戊午九月中浣ノ三品羽林源(花押)



「御伝鈔」は、本

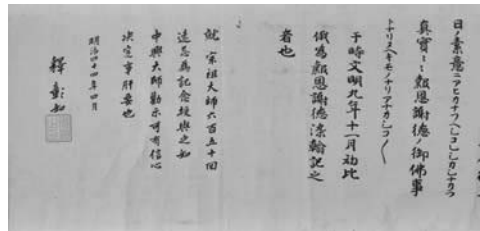
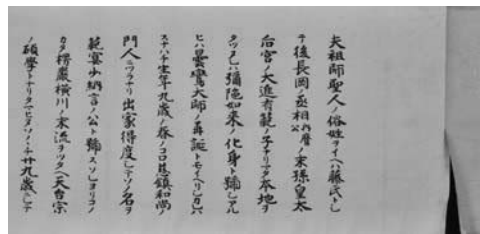
願寺第三代寛如(一二七〇〜一三五二)が編纂した絵巻「親鸞伝絵」のうち、詞書のみを独立させたもの。真宗最大の行事である報恩講で、毎年十一月二十五日に拝読される。本品は、安政五年(一八五八)に筆写されたもの。寺院によつては冊子のももよく使用されるが、絵巻物であったことの名残か、本品のように卷子であることが多い。

15 御俗姓 一卷 整版・袋綴 縦三三・一×横三六〇・九

【奥書】

就 宗祖大師六百五十回ノ遠宮爲記念授与之如ノ中興大師

勅示可有信心ノ決定事肝要也ノ明治四十四年四月ノ釈彰如(陽刻朱方印「光演ノ之印」)



「御俗姓」は、蓮如の御文の一つで、親鸞の俗姓や教えを記したものの。「五帖御文」(No.13)や「帖外御文」とは別に独立したもので、報恩講でのみ拝読される。本品は、明治四十四年(一九二二)に東本願寺第二十三代彰如が頒布したもの。年に一度だけの使用のためか、卷子のものがよく見られる。

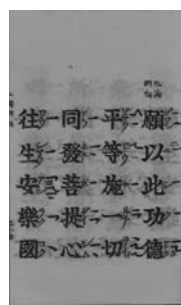
16 浄土三部経 一帖 整版・折本 縦一四・四×横五・五



「無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」を二帖に合冊したもの。大正十二年(一九二三)再版本で、初版は明治四十一年(一九〇八)。料紙背面まで経文を印字し、大きさと厚みを抑えて携行用にしたもの。

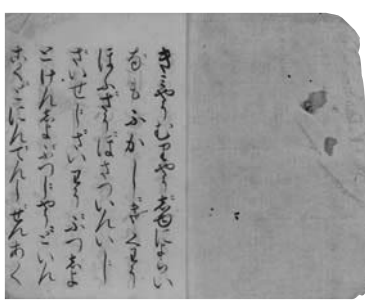
17 校正節譜大谷声明集 一冊

整版・袋綴 縦一五・三×横一〇・九



「正信念仏偈」や「三帖和讃」をはじめ、念仏・回向文など、真宗大谷派の僧侶が日常的に読誦する声明を合冊したもの。大正六年(一九一七)刊。大谷派で定式化した節譜(読誦の際の声音の高低を示した記号)が本文右傍に付される。現在でも同様のものが広く使用されている。

18 正信念仏偈・念仏并和讃 願以此(功)徳 御文武通 一冊 紙本墨書・仮綴 縦二七・一×横二二・二



「正信念仏偈」や「和讃」など、真宗門徒に広く親しまれた声明を平仮名で記した江戸時代の写本。表紙左に「所持智賢代」とあり、在家門徒の読誦用として筆写されたものとみられる。真宗の声明が門徒へ普及し、在家用の勤行集が流通していく様子が窺える。

【用語解説】

暗誦 あんじゆ 文章や歌・経文などを暗記して唱えること。

黄檗版一切経 おうぼくばんいっさいきやう 鉄眼版とも。黄檗山万福寺の鉄眼道光（二六

三〇〜八二）が発願し、寛文八年（二六六八）より開版された

木版一切経。これより前に開版された木活字版の宗存版・天海

版をにらるかにしのぐ部数が出版された。

折本 おりほん 卷子本の用紙を、巻かずに一定の幅で折り畳んだ本。表

と裏に紙や板の表紙を付ける。

莊經 じやうきやう 教えの根本となる経を仏前などに安置し、そこに教え

があることを表す荘嚴の一種。読経には使用せず、仏事を行う

際はこれに代えて、事前に読誦用の経を安置する。

卷子 かんじ 書写ないし印刷した紙を長く貼り継いで軸を付けて巻き

込み、絹や紙の表紙をつけた書物。

冊子 さつし 袋綴の書物を指す場合が多いが、厳密には、卷子と折本以

外の、糊や糸で綴じた装幀の書物をいい、粘葉装などもこれに

含まれる。

三方金 さんぽうきん 書籍の背を除いた三方の小口（天・地・前小口）に金

箔を塗布して装幀したもの。

声明 しょうめい 経文などに曲節をつけて仏事で唱える声楽。梵唄とも

本来は、古代インドの学問体系の五明の一つで、文法・音韻学

を指したが、口伝・日本で読誦するものとして発展

整版 せいばん 木版とも。印刷版のうち、古活字版と区別した呼称。一

枚の板に本文を左右反転させて彫り、紙に刷ったもの。

千字文 せんじふもん 中国の梁代に成立した韻文。すべて異なる文字によつ

て、四字一句、二五〇句の二〇〇〇字を構成したもの。

宋版一切経 そうばんいっさいきやう 北宋から南宋にかけて開版された種々の版本一

切経の総称。開宝四年（九七二）開版の開宝蔵（蜀版）北宋勅

版とも）をはじめ、東禪寺版（一〇八〇年開版、開元寺版（一

一一二二年開版）、思溪版（北宋末開版、磧砂版（一二三二年頃

開版）などがある。

朝鮮綴 ちょうせんずい 袋綴本のうち、綴じ穴が五つあるもの。朝鮮の刊本な

ど大型の書物に用いられた。

粘葉装 ねんちようさう 料紙を二つ折りにして重ね、折り目の外側どうしを

糊付けした書物。開くと、貼り合わせのない平らな面と、糊付

けのために浮き上がった面が交互になる。

転読 てんてき 大部の経典を、題目・品名や経文中の要所数行などのみ

読誦し、すべてを読誦したことに代えること。経典を大きく翻

し広げる作法を伴う。

袋綴 ぶくろずい 料紙を二つ折りにし、表紙・裏表紙を付けて、料紙折り

目の反対側を糸で綴じた書物。各料紙が袋状になるのでこう

呼ばれる。和装本の代表的な装幀で、四つ穴の明朝綴が多い。

報恩講 ほうおんこう 親鸞の命日である十一月二十八日に行われる仏事。

真宗最大の行事で、忌日の二十八日を結願として七日間行う

のが王式。

法隆寺一切経 ほうりゅうじいっさいきやう 承徳二年（二〇九八）頃から大治年間（二一

二六〜三二）頃にかけて、太子信仰の興隆を背景に、法隆寺僧

たちが勧進を募って書写した一切経。約七二〇〇巻が書写さ

れ、約一五〇〇巻が現存する。

僚巻 りょうかん 複数巻・複数冊ある書物や経典において、同一セットに

含まれるもの。

六時礼讃 りくじらいさん 昼夜六時に仏徳を讃嘆するために修する行法。善導

（六一三〜六八二）が撰述した『往生礼讃』にもとづく。



同朋大学仏教文化研究所二〇一七年度前期史料展示
お経のかたち〜来て見てさわって仏教文化〜

編集・発行 同朋大学仏教文化研究所

千四五三―八五四〇

名古屋市中区稲葉地町七―一

（電話）〇五二―四一一―三三三三

発行日 二〇一七年七月七日

印刷 双光エシックス株式会社